

子どもと家族および地域社会におけるソーシャルワークの方法 に関する基礎的研究

Basic Study on Social Work Method in Child or Family and Urban Community

松本 寿昭¹, 加藤 悦雄¹, 井上 修一²

¹家政学部児童学科, ²人間関係学部人間福祉学科

キーワード: 子ども, 家族, ソーシャルワーク, 地域社会

1. 研究の目的

(1)本研究の目的

本研究の目的は, 子どもの育ちと居場所づくりについて家族や地域社会の現状を把握し, そこでの指導や援助の方法について, ソーシャルワークの視点から検討することである. 具体的には, 児童館などで行われている子育て支援の活動について, ソーシャルワークの視点から検討し, その有効性と限界を明らかにすることである.

(2)対象と方法

葛飾区内の児童館・子育てひろば 4 か所, 多摩市唐木田児童館の計 5 児童館・子育てひろばを対象にアンケート調査(対象者は, 子ども<69名>と保護者<155名>), および児童館職員, 並びに NPO 法人, 社会福祉法人の職員計 23 名を対象にソーシャルワークに関する内容のインタビューを実施した. 方法は, アンケート調査は京大のスーパーコンピュータで集計した. インタビューは, 当初の柱に沿って面接し, 内容について検討した.

2. 活動実施報告

(1)アンケート調査の結果

アンケート調査の対象となった児童館と子育てひろば(地域子育て支援拠点事業)は, 児童館で実施されている学童保育(放課後児童健全育成事業)を別にして, 子どもや家庭の地域生活圏に根ざした利用型施設(事業)という特徴をもつ. 利用型施設は, 子どもや子育て家庭であれば, 誰にでも門戸が開かれている. 逆にいえば, これらの施設(並びに専門職)による支援は, 日々利用者が自発的に足を運ぶことを前提としている. したがって, 子どもの権利や福祉ニーズに基づき子どもや保護者が進んで利用を希望する支援内容を考慮する必要がある.

そこでアンケート調査では, 子ども(小・中・高校生)や保護者(乳幼児の在宅育児者)を対象に, 利用する理由, 並びに利用を契機とする生活

上の変化, 利用によって得られた印象的な出来事, さらに利用者・当事者の立場による社会的提言に関して回答を得た. 紙幅の都合上, 調査結果の一部を報告する.

保護者に対して, 児童館や子育てひろばを利用する積極的な理由について回答を得た(表 1 参照). 約 95%の保護者が「子どもにとって良いからを理由に挙げている. 子どもに少しでも良い環境や機会を与えたいと考えており, 定期的に通う保護者像を見出すことができる. 各理由に関する具体的な内容を整理した結果, カテゴリー 2 の 15 項目が導き出された.

表 1. 児童館や子育てひろばを利用する理由

カテゴリー1	カテゴリー2
子どもにとって良い (147名/94.8%)	子ども間交流, 子どもが望む, 魅力的空間, 遊び道具
自分にとって良い (93名/60.0%)	人との出会い, 息抜き, 子どもが遊ぶ, 子育ての学び
保護者と交流できる (109名/70.3%)	友達との交流, 情報交換, 悩みの共感, 相談相手
職員が身近に居ること (86名/55.5%)	親切的対応, 身近な相談相手, 遊びと見守り支援

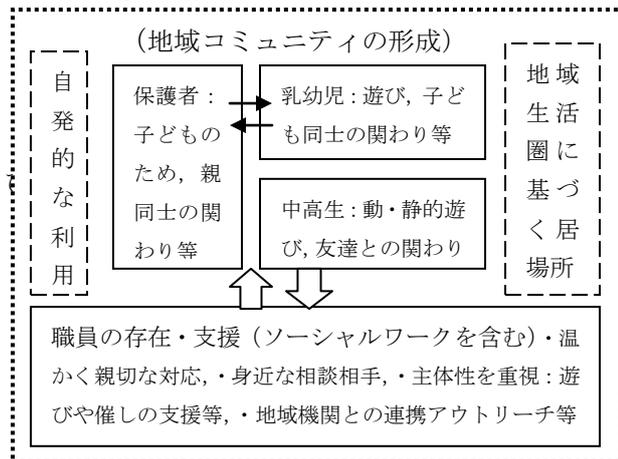
続いて, 子どもに対して, 児童館で過ごすことを契機に気持ちや生活に生じた変化の有無について回答を得た. 各項目について「そう思う」「少しそう思う」と回答した人数と割合を抽出した(表 2 参照). それによると, 約 83%の子どもが「友達を好きになった」と指摘している.

表 2. 児童館利用を契機とする気持ちや生活の変化

カテゴリー	そう/少しそう思う
自分を好きになった	25名 (36.2%)
友達を好きになった	57名 (82.6%)
おとなを信頼できてきた	40名 (57.9%)
関わりを好きになった	46名 (66.7%)
生きていることが楽しい	49名 (71.0%)
新しい考えを得られた	38名 (55.1%)
自分に自信がついた	38名 (55.0%)

アンケート調査の結果を踏まえ、地域生活圏に根ざした利用型施設における子ども家庭支援のあり方を抽出した。施設職員が媒介役となり、親子・保護者同士・子ども同士・保護者と子ども・さらに地域の結び付きなど、良好で豊かな関係性を創出する働き等が明らかになった(図1参照)。

図1.地域生活圏に根ざした利用型施設における子ども家庭支援のあり方



(2)インタビュー調査の結果

児童館4か所、NPO法人2か所、社会福祉法人2か所、その他2か所計10か所、23名の職員に面接を行った。その結果、以下の点が明らかになった。

1) ソーシャルワーカーの立場について

来館者(子どもや保護者)に丁寧なことばで対応すること。指導ではなく手助けを心掛け、来館者中心の活動。さらに、笑顔、来て楽しいと思える環境づくり。相手(障害者)の立場を理解することなど、いずれの施設の職員も相手(来館者や障がい者)の立場を尊重し、その主体性を支えることが日々の活動とされている。

2) ソーシャルワーカーとして援助・指導にあたる際の基本理念

相手の話を聴くこと。個から集団への広がりを支援すること。相手と同じ気持ちになれるよう一緒に考え合うこと。精神障がい者の場合、デリケートで傷つきやすい対象者であり、その人の人間としての深さを真に理解すること。相手と同じ気持ちになれるよう心が掛けることなどである。

3)効果的な援助・指導について

児童館は基本的には見守り、来館者の状態を把握し、必要に応じ支援する。母子共に楽しめる場づく

り、精神障がい者は、関わりながらでしか、相手が理解できない。知的障害者は、自分で意志表示が出来ないため、着かず離れずの対応で相手の気持ちを感じ取ることなど、相手主体の対応がなされている。

4)記録の方法について

活動記録、日誌、電子ファイルに記録するなど施設により記録の方法は異なっているが、援助・指導の質的向上を図る上でからいずれの施設も記録は施設として、そして個人的にもとられている。

5)指導上の課題について

児童館や子育てひろばでは異年齢間の子どもの交流の促進、健全な子育て環境づくりが課題である

3. 研究目標の達成状況

子どもの育ちや居場所づくりについて、児童館、NPO 法人(子育て広場、障がい児の在宅支援)、社会福祉法人(精神障がい者通所施設、母子生活支援施設)などでは来館する子どもや利用者本位の運営がなされている実態が明らかになり、そこでの援助・指導もソーシャルワークの方法に基づいた実践が行われており、当初設定した研究課題についてはほぼ計画通りの成果が得られた。中間報告の際疑問視していた点についても解消された。

4. まとめと今後の課題

児童館を中心とした(1)アンケート調査の結果は、(2)インタビューで語られた来館者を温かく、笑顔で迎え、来館者の意向を踏まえた対応が行われていること。来館者に不満が残らないよう注意深く対応されており、その他の施設でその分野の専門家が、しっかりした理念に基づき施設の運営にあたっておられること。今後は、保育所やその他の児童福祉施設で検討を重ね、そこでの子育て支援とソーシャルワークの関係明らかにすること。

5. 研究成果

3)その他

[1] 平成 23 年度共同研究プロジェクト研究報告書、松本、加藤、井上編「子どもと家族および地域社会におけるソーシャルワークの方法に関する基礎的研究」、2014. p1-48.